岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

自己の在り方を振り返りながら進める「教育・学校心理学」の授業

メタデータ	言語: ja 出版者: 岐阜大学教育推進・学生支援機構教職課程支援センター 公開日: 2024-04-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古田, 信宏, 錦見, 政哲 メールアドレス: 所属: 岐阜大学, 岐阜県立大垣特別支援学校
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/0002000581

自己の在り方を振り返りながら進める「教育・学校心理学」の授業

東海国立大学機構　岐阜大学　教育推進・学生支援機構
教職課程支援センター　特任教授
古　田　　信　宏
岐阜県立大垣特別支援学校　就労オフィス　支援員
錦　見　　政　哲

キーワード；教育・学校心理学，自己理解，学習，発達，集団

教育職員免許法において，心理学は必修科目となっている。総じて「教育・学校心理学」と称されるが，中でも学習心理学や発達心理学はその基盤となる学問分野である。また，一人の児童生徒の行動を分析するだけでなく，その児童生徒と所属する集団との関わりを丁寧に把握し理解することは，学校現場において教育を進める上で必要不可欠の理論である。

しかしながら，学校現場において心理学の理論が活用されているかと問うと，筆者には疑問に感じることが少なくない。特に発達に関する内容については，児童生徒が発達の途上にあることを忘れ，完成形を求めるような風潮さえ見られる。今回は，受講生が授業の中で自分自身の在り方を振り返りながら，心理学の知見を理解できるよう，授業の在り方を工夫，実践した。

１．初めて心理学に接する学生に向けて

心理学は，多くの大学生にとって，初めて体系的に学ぶことになる学問領域である。しかし，心理学に関する内容については，小中学校の保健体育や高校の公民の授業の中で触れる機会は少なくない。とはいうものの，年間わずか数時間程度である。むしろ，人格検査や行動予測の形で書籍やＳＮＳを通じて興味本位に近い伝わり方をしていることの方が多いように思われる。

実際，この「教育・学校心理学」の授業の第１時においてグループワークとして「私と心理学」を題材にフリートークをさせたところ，次のような意見が交わされた。

- 人の気持ちを読めるようになって面白そうだ。でも逆に，自分の心の中が読まれてしまうような怖さも感じる。
- この行動をする人はこういう考え方の人，のようなタイプ分けをしている感じがする。なんでもない行動なのに，そこに意味が勝手に付けられて不愉快になった経験がある。
- 中学生の頃，友達との関係で悩んでいた時に，学校の相談員に話すことができてとても心が楽になった経験がある。

ところで，筆者らが担当する教職課程支援センターでは，教員養成学部である教育学部以外に在籍し高等学校教員免許の取得を志す学生を対象として，教職に関する科目の授業を担当している。筆者が担当しているのは，次の４科目である。

○「教育・学校心理学（高等学校）」＝主に１年次生対象，後学期前半，１単位８時間
○「特別支援教育論（高等学校）」＝主に１年次生対象，後学期後半，１単位８時間
○「生徒指導と進路指導」＝主に２年次生対象，後学期，２単位 15 時間
○「学校教育相談」＝主に３年次生対象，前学期，２単位 15 時間

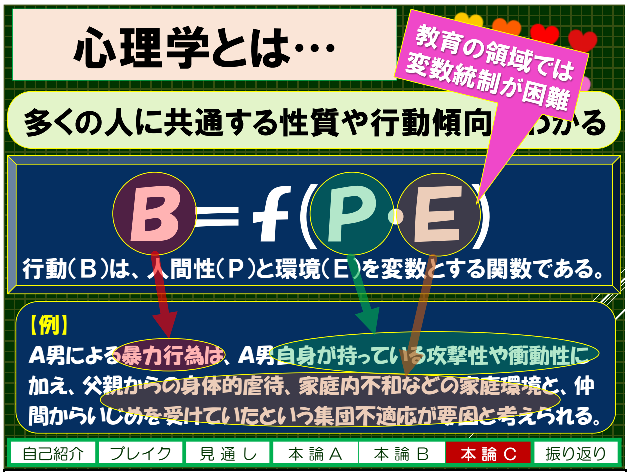
2023 年度に教職課程を受講していた学生の内訳は以下の通りである（１月末時点）。

<table>
<tr><th colspan="2"></th><th>１年次生</th><th>２年次生</th><th>３年次生</th><th>４年次生</th><th>大学院生</th><th>合計</th></tr>
<tr><td colspan="2">工学部・応用物理</td><td>３</td><td>８</td><td>６</td><td>６</td><td>・</td><td>２３</td></tr>
<tr><td rowspan="2">応用生物科学部</td><td>生産環境科学課程</td><td>１５</td><td>８</td><td>１０</td><td>１６</td><td>・</td><td>４９</td></tr>
<tr><td>応用生命科学課程</td><td>１４</td><td>１２</td><td>４</td><td>１０</td><td>２</td><td>４２</td></tr>
<tr><td colspan="2">合　　計</td><td>３２</td><td>２８</td><td>２０</td><td>３２</td><td>２</td><td>１０４</td></tr>
</table>

工学部では数学，応用生物科学部では理科または農業の高等学校教諭一種免許状を取得することができる。

このように，受講者は全員が理系である。一方，教職に関する科目は，「教育課程論」「教育経営論」など，文系（社会科学）が多い。筆者が担当する心理学もまた，大きくは人文科学として文系科目に分類される。

第１回授業「教育・学校心理学で何を学ぶか」の授業では，その冒頭部分で受講生に「虚記憶」に関する簡単な実験を行い，その結果がそれまでの研究結果と同じ 70%であったことなどから，心理学が科学的な根拠に基づくものであるという体験をさせた。さらにその授業のまとめとして，レヴィン（Kurt Lewin）の関数（→資料１）を示した。理系を得意とする受講生が多い状況を踏まえ，「心理学は科学的な手法をもって研究する学問である」ことを強調するようにした。ただし，特に教育の分野においては「Ｐ（人間性）」についても「Ｅ（環境）」についてもあまりにも変数の幅が大きく，その統制がきわめて難しい学問領域であることも加えて話した。



資料１「心理学で何を学ぶか」授業資料№38
（2023.10/2　「教育・学校心理学」①）

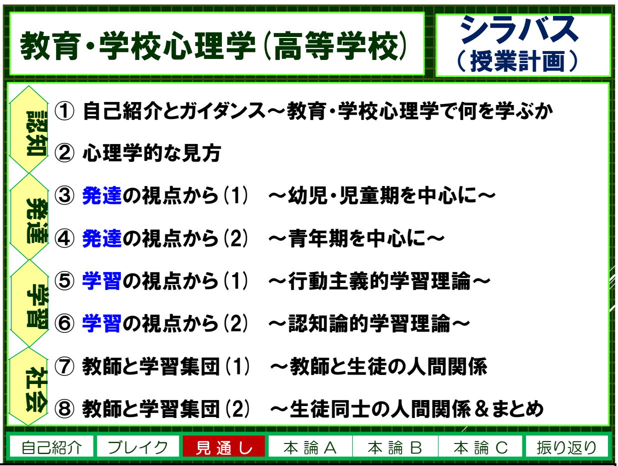
この日の学修レポートには，次のような感想があった。

・自分が心理学を学ぶことになるとは高校生の頃には思ってみなかった。ずっと理系だった自分には関係がないと考えていたからだ。しかし，今日授業を受けてみて，人間の行動にはいろいろな要因があってそれが関わり合っていることを知り，自分自身の心理をあらためて振り返ってみたくなった。（応生・応生）

・心理学は科学ということが分かり聞いていて面白く興味をひかれた。今まで「単なる当てずっぽうじゃないの」と思ってきたけど，そうではなく科学であることが理解できた。（応生・応生）

・Ｂ＝ｆ（Ｐ・Ｅ）という関数は，万能で納得のいくもののように見えたが，その実，数値化することは難しく，どのような項目をどの程度考慮するのかというのは大変なことだと感じた。（応生・生環）

その上で，本科目（１単位８時間）のシラバスを資料２のように提示した。



資料２「心理学で何を学ぶか」授業資料№14
（2023.10/2　「教育・学校心理学」①）

２．青年期の発達に関して

(1) 発達に関する内容は２回に分けて

発達に関する内容は，教育・学校心理学に欠かせない内容である。岐阜大学教育学部においては，発達心理学として２単位 15 時間を要している。が，本授業においては全８時間中の２時間を，幼児・児童期を中心とする発達と，青年期を中心とする発達のいう２回に分けて概略を学修させる。

受講生が取得するのは高校教諭の免許であり，したがって高校生の時期に相当する青年期の心理を学ぶことは当然であるが，昨今は家庭教育の在り方が問われることも多く，幼児・児童期の生育歴を理解しておくことは重要と考える。また，教員という道を選択しなかったとしても，将来は親となり子育てをすることになることを考えれば，幼児・児童期の発達について修得しておくことは大きな意味がある。受講生自身について考えても，自身がどのような家庭環境でどのように育てられてきたかを振り返ってみることは大切である。

一方，青年期の心理については，今まさに受講生自身がまっ只中に立っており，人間関係や進路選択などで迷いに迷っているため，客観的には受け止めづらいという時期でもある。だからこそ，青年期の心理についてのきちんとした理論や対応例などについて学んだ上で自己理解を進めることには大切となる。本授業においては，この「自己理解」の部分にあえて重点を置き，今抱えている迷いや悩みが成長の糧となることに気付かせたいと考えた。

なお，この第４時には共同執筆者である錦見も参観・参加した。

(2) 第４時「発達の視点から　～青年期を中心に～」の授業実践について

【① 導入時から心を開かせるために】

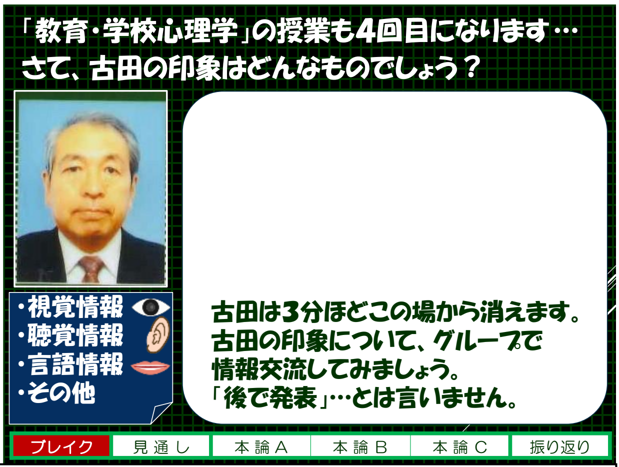
この授業においては，毎回の導入時に「ブレイクタイム」と称してグループワークを採り入れている。ここで「古田（授業者）の印象をグループで情報交流」（資料３）は，２つの目的を持っている。

（ア）授業者の印象に残る情報を考えさせることから，「メラビアンの法則」（資料４）という心理学的知見に結びつける。さらには，この「メラビアンの法則」が就職試験等の面接時にも活用されていることを理解する。

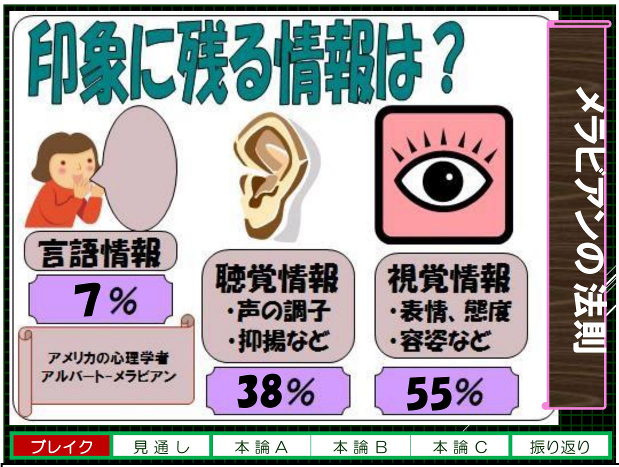
（イ）その後，「古田は３分ほどこの場から消えます」，「後で発表・・とは言いません」との指示は，授業者に気兼ねすることなくグループ内で何を話しても良いという雰囲気を作り，グループ交流をより活発にさせる。

これらのことは，本時に受講生自身が自分を見つめるにあたって，心のバリアを少しでも低くする効果があった。

この部分について，学修レポートの感想欄には，次のような記述が見られた。



資料３「青年期の心理」授業資料No.4
（2023.10/30　「教育・学校心理学」④）



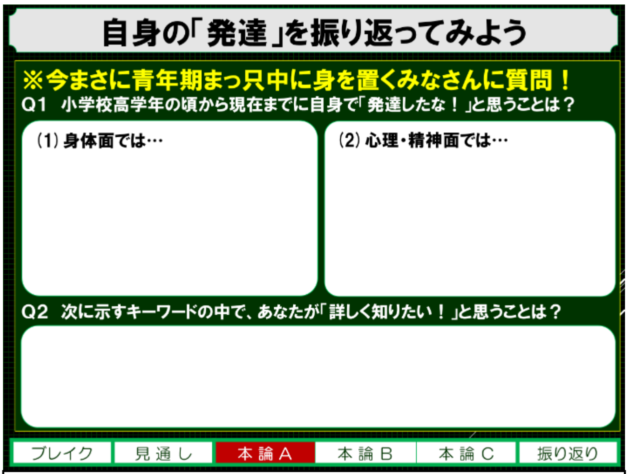
資料４「青年期の心理」授業資料No.5
（2023.10/30　「教育・学校心理学」④）

- 先生のネクタイはいつもおしゃれなので，品のあってかわいげのあるおじいちゃんというイメージです。話し方がおっとりしていて，とても聞きやすい声だと思います。スライドの資料もとても見やすくて，引きつけられます。
- 先生自身が題材となって心理学の知識「メラビアンの法則」を教えてもらえたことにはちょっと驚き，じゃあ自分はどう見られているかを客観的に知りたいと思った。

【② 自身の発達を見つめさせるために】

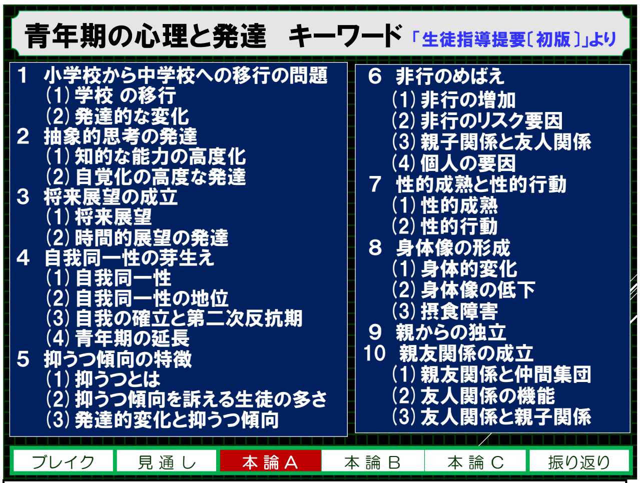
本論に入り，まず自分自身の発達（成長）を身体面，心理・精神面の両面から見つめる時間を設けた（→資料５）。さらに，本時の内容について重点を置いて授業を受けることができるようにするために,，詳しく知りたいと思っていることをいくつかのキーワード（→資料６）から選択させた。このキーワードは，「生徒指導提要（初版＝2010 年 3 月）」の「青年期の心理と発達」の項目を参照している。

青年期の発達の最大の特徴は，「エリクソンの発達段階」にある自我同一性（アイデンティティ）の獲得である。この概念を理解させる際に，受講生自身の「発達」の振り返りを行い，「アイデンティティ」について，青年期にある自分自身のこととして捉えさせることを目指している。概念の理解だけではなく，受講生自身の発達段階や状態を考えさせるものである。



資料５「青年期の心理」授業資料No.14
（2023.10/30　「教育・学校心理学」④）

ただし，受講生の中には，自身の発達の状態やこれらのキーワードについて関心をもちながらもあまり表に出したくない心理があることも当然だと考えている。導入時に心を開くための活動を採り入れたとはいえ，他人の印象について語ることと自分自身について見つめることとは次元の異なることであり，その解離もまた青年期特有のものであろう。そこで，この部分については各自が資料に書き込む時間のみとし，グループ等での交流の時間は設けていない。



資料６「青年期の心理」授業資料No.15
（2023.10/30　「教育・学校心理学」④）

さらに授業中盤の「将来展望の成立」では，受講生自身の将来を考えさせる契機（人によっては再考）としている。こうして，受講生自身に「現在の自分に向き合い，これからどう生きるか」と投げかけた授業展開とした。特にここでは，青年期の誰もが「先（夢や希望）は明るいが，足下（志望）は真っ暗…」という状況にあることを強調し，青年期真っ只中にある受講生の不安を増幅することのないように留意した。

なお，「生徒指導提要（初版）」や「エリクソンの発達段階」には，専門用語や抽象的な表現が多くあるが，その都度，学校現場での事例や身近な出来事等を取り上げ，かみ砕いて説明を加え，専門用語等の理解を進める手助けとした。

この部分についても，学修レポートの中に出てきたいくつかの感想を紹介する。

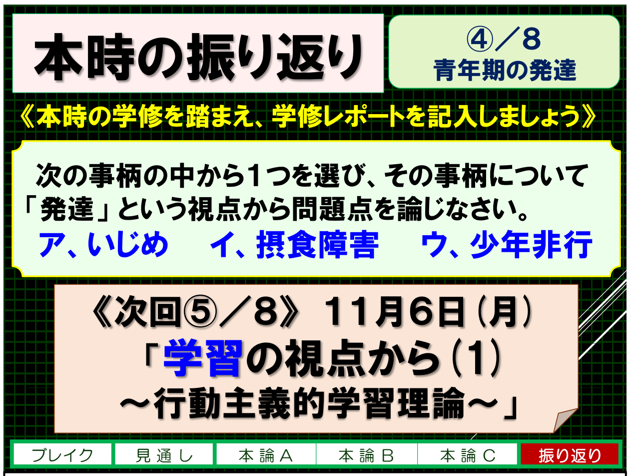
・「反抗期」って，自分には分かりづらい。でも，親から見ると顕著なようで，自分の親は自分が何か主張すると，「あっ，今，反抗期だ！」と言って気付かせてくれるタイプだっ

た。自分で意識してないだけに，そう指摘されるとけっこう心にカチンとくるけど…。（工学部）
・大学に入って独り暮らしをするようになって髪を長く伸ばし始めたが，髪を伸ばしている間は自分の人生を自分の好きなように生きていられる気がしていた。今は髪を短くしたが，長く伸ばしている間に自分の生き方の軸が固まってきたように思う。（応生・生環）
・先生の息子さんの「反抗期」のエピソードを聞いて，両親と姉２人の家族全員が公務員の自分が大学進学で迷っていた頃，「公務員にだけは絶対なりたくない」と何度も言っていたことを思い出した。今は迷っているが，あの頃の頑固さを思い出すと，自分がなんだかかわいく思えてきた。（応生・応生）

【③ 振り返りの学修レポートはテーマを選択して】

この授業では，毎回テーマを提示し，そのことについての自分の経験や考えをまとめるかたちで記述させている（資料７）。これは，特定の分野の「心理学」の知見だけを身に付けることよりも，ここで得た知見をもとにその事柄について自分の考えを持つこと，論ずることが大切だと考えているからである。

本時の「学修レポート」は，青年期における「いじめ」「摂食障害」「少年非行」の題材から選んで論じさせた。授業内容の「親友関係の成立」，「親からの独立」「身体と精神のアンバランス」等と関連した具体事例であり，本時の授業内容を理解した上で自分の経験等も踏まえて考えをまとめさせることをねらいとしている。



資料７「青年期の心理」授業資料No.41
（2023.10/30　「教育・学校心理学」④）

選択されたテーマは，次表の通りである。（全受講者数 32，欠席者０，男子学生 12，女子学生 20）

選択肢	レポート数	内訳
（ア）いじめについて	１１	男子学生；５，女子学生　６
（イ）摂食障害について	１７	男子学生：４，女子学生１３
（ウ）少年非行について	４	男子学生：３，女子学生　１

内訳を見ると，「摂食障害について」の男女差が顕著に見られる。これは，実態として摂食障害が圧倒的に女子に多いことを反映していると思われる。自分自身が摂食障害になったと記述した受講生はいなかったが，家族や親しい友人が摂食障害で苦しんでいる姿を見たことのある学生は少なくないと感じられる。かなり具体的に「拒食期と過食期を繰り返していた」や「食べ過ぎてはトイレでこっそり吐き出していた」姿を見た記述もあった。小学校高学年から中学生の頃，自身について「太っている」というイメージを持っていた受講生

は数名いた。

いじめについては，見えないところで起きている事案を知っている受講生が数名いた。特に高校生段階では，学校の教員がＳＮＳなどのデジタル空間でのいじめをどうすれば発見するのか，発見した場合にどう対応すればいいのか，という点で対応方法を具体的に知りたいという思いも記述されていた。

少年非行については，高校生になってから現実に直面したような内容の記述はなかった。このことは，教職課程に受講生の多くがいわゆる進学校の出身であるため，学校が荒れている様子を見ることが少ないことと関連するだろう。むしろ，実際の反社会的な行動を知らないだけに，どう対応していいのか分からないという不安も抱えているようだ。

以下，本時の学修レポートについて，数点を抜粋する。

【いじめについて】

・いじめを正当化するつもりはないが，教育現場でいじめに全く関わったことのない人はいないのではないだろうか。いじめの多くは人間関係の不和だと思うが，もともと人は一人一人違っているのだから，合う，合わないがあって当然だろう。それが他人に危害を加えるなどのいじめという行動にならないように気を配る必要がある。（応生・生環）

【摂食障害について】

・メディアでも，よく女性の体型に関する情報が流される。このことが，青年期女子の「痩せ礼賛」につながりやすいのだと思う。青年期は他にも不安の要素が多いため，自分について学ぶという気持ちで，「青年期の発達」に関心を持たせ，身体像の変化と精神面への影響について少しでも安心できるような指導が必要だと思った。（応生・生環）

【少年非行について】

・最近あまり目立たなくなった少年非行だが，このこと自体は社会的には良いことととらえられるだろう。少年非行は自己の主張という意味では自立性のある行動だが，その表現方法が誤っていると思う。自己主張を抑制しているのではなく，SNS など別の形で表現しているとも考えられる。（工学部）

【感想】

・女子の「偽りの自己行動」のイメージは確かにある。でも，男子（特に同年代の）に対しては当たりが強くて，期待に応えるつもりはさらさらないのではないかと，とさえ思える。（応生・応生）

・「心理的離乳」について，大学生になってひとり暮らしを始めてから親のすごさが分かって，親を尊敬することができるようになった。（応生・応生）

これらの「学修レポート」は，授業後に全員分について評価とコメントを加え，翌週の授業で受講生に返している。さらに，その中から何人かのレポートを抜粋し，翌週の授業の冒頭で紹介するようにしている。その授業で生まれた疑問に答えたり，関連する知見を付加したりすることも多い。このことは，他の受講生がどんなレポートを作成しているかを知る機会でもあるし，どんな学びをしてどんなことを考えたかを交流する機会ともなっている。

３．教師や学習集団が個人に及ぼす影響について

(1) 第７時「教師と学習集団(1)　～教師と生徒の人間関係～」の授業実践について

【① 授業で採り上げた「効果」は４つ】

学校が集団学習の場である以上，所属集団の雰囲気や風潮，価値観は，生徒一人一人の行動に大きく影響する。そしてその集団づくりにおいて，教師の言動が及ぼす影響（効果）もぬぐうことはできない。

第７時では，教師と生徒との人間関係について，リーダーシップの側面のほか，資料８に示す４つの影響（効果）について概説した。この授業の「学修レポート」は，この４つの中から一つを選び，教員として（または一人の大人として）活かしたいことや留意したいことを論じさせた。

資料８「教師と学習集団(1)」授業資料№15
（2023.10/30　「教育・学校心理学」④）

受講生が採り上げたテーマの数を次表に示す。受講生の心に印象づけられたのは，ピグマリオン効果とハロー効果であった。

テーマ名	人数
ピグマリオン効果	１２
ゴーレム効果	４
ハロー効果	１０
プラシーボ効果	５

【② ピグマリオン効果について】

教師の期待によって学習者の成績が向上する「ピグマリオン効果」については，自分自身が親や教師からの期待を受けて育ってきたという経験を採り上げた記述が多かった。

・自身の経験から，高校の教員になった際には，ピグマリオン効果を活かしたいと考えた。自分も両親や教員から期待されると成績が上がっていったし，逆に関心を持たれなくなると成績が振るわなくなってしまった経験がある。また，学習成績に関係なく，親や教師からポジティブな言葉をかけられることは，人格の形成にもよい影響があると考えられる。（応生・生環）

・ピグマリオン効果には留意が必要だと感じている。多くの生徒は，高校に進学するまでの間に褒められたり期待されたりした経験を少なからず持っている。しかし，褒めたり期待したりする内容によっては，かえって不信感を抱かせてしまったり，「本当に期待しているのか」というネガティブな感情を呼び起こしてしまったりすることもあるのではないか。また，自分がそうであったように，期待というプレッシャーに弱い生徒も存在している。生徒の特徴をよく知り人間関係を築いた上で，適切な期待をかけるようにしたい。（応生・応生）

【③ ハロー効果について】

目立つ特徴に引きずられ，別の面の評価が歪められる「ハロー効果」もまた，多くの受講生が経験している。中でも「親が教員である」ことによってひいき目に見られたり，逆に「親が教員なのに…」と残念がられたりした経験の記述も数点見られた。

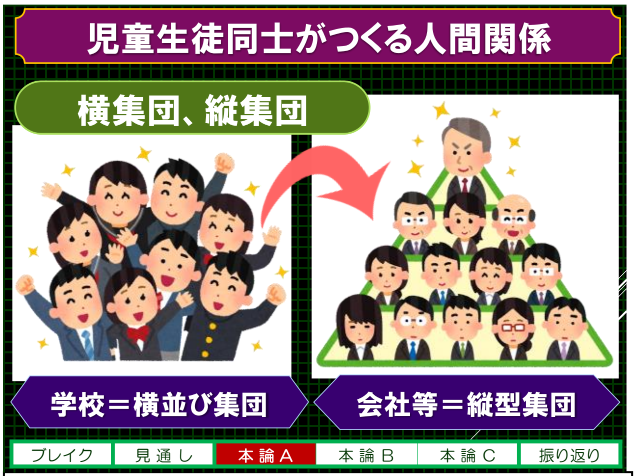
・ハロー効果には留意が必要だと考える。他人の関する目立つ情報から勝手に分類してしまうことがあるが，分類した先には偏見も起こりうる。偏見をなくすには，自分が偏見を持っていることを自覚することや，様々な価値観を持つ外の集団と交流することを意識することなどが考えられる。（応生・生環）
・家族としてひいき目に見ても，父は普段から顔つきが怖い。その父が，小学校の授業参観日にいかつい格好で現れたせいか，それから自分は仲間から避けられていたような気がする。その人自身とはあまり関係のない出身地や見た目，親の職業など，本人の能力や性格と関係なく勝手に決めつけてはいけないと強く感じている。「普通」とか「常識」とかいった言葉も安易に使わないようにしたいと思っている。（工学部）

<u>(2) 第８時「教師と学習集団(2)　～生徒同士の人間関係～」の授業実践について</u>

「教育・学校心理学」全８回の授業の最後は，次の点について概説した。

Ａ．児童生徒同士がつくる人間関係
（ア）仲間意識の変容（成長・発達）　　（イ）人間関係が要因となって起きる諸問題
Ｂ．集団生活の中で起きる様々な心理
（ア）同調行動　（イ）ゆでガエル現象　（ウ）正常性バイアス　（エ）２匹目のどじょう
Ｃ．高め合う集団にするために
（ア）集団の成員一人一人に育てたい力　（イ）リーダーとしての教員に望むこと

この中で，受講生が学修レポートに多く関心を持ったのは，「Ａ．児童生徒同士がつくる人間関係」の「(ア) 仲間意識の変容（成長・発達）」で概説した「縦集団・横集団」に関する内容（資料９）で，30人中８人が採り上げている。



資料９「教師と学習集団(2)」授業資料No.11
（オンデマンド「教育・学校心理学」⑧）

・縦集団では，年齢が違うので，相手が年下だとある程度気を遣ってくれる。同年齢だと，嫌なことでも平気で言い合えるので，それは良さでもあるが，相手が傷ついていることに気付かないことにもつながるような気がする。「親しき仲にも礼儀あり」ということの大切さが分かったように感じた。（応生・生環）
・学校のような横集団にはうまく適応できなくても，異年齢集団である縦集団の中でなら適

応できることは，自分も経験した。特に中学生の時は，担任やリーダーの子が「クラスみんなで」や「一丸となって」と言うのが嫌で，集団で行動することも避けたいと思った。でも，アルバイトで先輩から指導を受けることは平気だし，高校の部活で後輩に「チームとして」と言っている自分にも驚いた。（応生・応生）

４．まとめとして

心理学という学問に初めて触れる教職課程の受講生に対して，８時間という短期間の中で教育や学校に関する心理学的知見を教えることためには，かなりの内容の精選が必要である。学生の中には，心理学が性格分類や行動予測，場合によっては「占い」に近いものとしてイメージされているものも多いように感じている。

その中で，まずは心理学が「科学」であることを強調した。さらには，自分の生活の中にいかに関わっているものであるかを感じさせたいと考えた。これを授業として具現するために，受講生一人一人が自分を見つめる授業の在り方を工夫するとともに，自分を見つけることの怖さも感じながらもグループワークで仲間と考えを交流することの面白さを味わえるように仕組むことができたのではないかと感じている。

この授業での学びを土台として，受講生たちが教員として，あるいは一人の社会人として，人の心を大切にする存在となっていってほしいと願っている。

【おことわり】

この論文の中で引用している受講生の感想や学修レポートについては，受講生の了解を得ているわけではない。したがって，できる限り個人が特定されないような形で，内容を変えない程度に原文を改変している。

◆ 参考文献

※　**「生徒指導提要（初版）」**　文部科学省　2010 年 3 月　教育図書
※　**「生徒指導提要（改訂版）」**　文部科学省　2022 年 12 月　東洋館出版社
※　**「ゼロから分かる心理学」**　横田正夫監修　Newton 別冊　2019 年 3 月　ニュートンプレス
※　**「心理学超入門」**　横田正夫監修　Newton2019 年 12 月号　ニュートンプレス

◆　執筆分担

・「１．初めて心理学に接する学生に向けて」「２．青年期の発達に関して　(1) 発達に関する内容は２回に分けて」(P.24～P.26)は古田，「２．青年期の発達に関して　(2) 第４時『発達の視点から　～青年期を中心に～』の授業実践について」(P.27～P.30) は錦見，「３．教師や学習集団が個人に及ぼす影響について」及び「４．まとめとして」(P.31～P.33) は古田が中心となって執筆した。